

外国人の見たイタリア

—イタリアとイタリア人—

家田 義隆

私はいままでこのテーマに関し四つの小論を発表してきた。⁽¹⁾本論は主にその四つの小論を材料とし、その上に今までのイタリア史研究から得た知識を加えて、イタリアとイタリア人について論を展開してみようとするものである。外から見たときイタリアとイタリア人はどのように映り、どのようにとられてきたのか。それを16世紀から19世紀末まで歴史的に追跡して結論を出してみようとするものである。

確かに外国人が外国人を見たとき、そこにはどうしても避けられない偏見もあるし、誤解もある。それらが一般化されてステレオタイプ化したまちがった単純化もある。これらのことは注意せねばならないが、他面以外に鋭く、正確に、特性、特質を指摘し、つかんでいることも事実である。いろいろの国の人と同じ特質、同じ性格を指摘し、表現していることになれば100パーセントとは勿論言えなくとも、ほぼ正しく指摘していると言ってさしつかえないのではないか。そういう複数の国の複数の人が指摘しているイタリア、イタリア人の特質、性格を集め、分類し、分析して、外からのイタリア、イタリア人論を展開し結論を出してみる。

ただこの方法だけで結論を出すのは不十分であるのは勿論承知している。当のイタリア人が自分達をどう考え、どうとらえているかを検討せねば片手落ちである。その両者を総合したとき本当の結論は出せるが、それに至

る一里塚としてまずは外から見たイタリア、イタリア人論の結論をこの論文では出してみる。

1 イタリア

まずはイタリアという国を外国人はどう見てきたのか。多くの外国人はイタリア人が自身の国イタリアをどう見ているかをいろいろの機会に知って驚いてその特色を指摘する。そこから見えるイタリアとはどういう国であるか。

その(一) イタリア人の国家観

多くのイタリア人は自分の国家を信用しないと外国人は見る。権力に対して深い疑念を持ち、距離を置いていると見る。そこから政治権力と一体となって事を運ぶような姿勢はなく、常に利用しようとする。利用出来ねば無関心である。自分は自分でやって行こうとする。例えばイタリアのアングラ経済を見てみるとその感は強い。

国家の捕捉していない地下経済(税金が払われていない)の隆盛でイタリア経済は成り立っていると言っても間違っているわけではない。今現在どの程度であるか明確ではないが、以前はGNPの20~30%になるのではと言われていた。それほど額の額が国家を信用しないで、闇の経済へ流れていた。どう使われる

かわからない税金を払わせるような国家への協力はしないのだ。

彼等にとっては「国家は武器を奪い取るように奪い取ってもよいし、支配の道具を利用するようにそれを利用してもよい。個人は国家から自分を守らねばならない。なぜなら国家は個人にとって必ずしも恩恵的なものとは思えないからである。…彼等は一旦権力を自分のものにしたとき、自分のために、また友人のために権力を濫用しても驚きもしなければ、怒りもしない」。別に原因はまだあるかもしれないが、歴史がこういう国家観を作り出してきた第一原因であると思う。共和制ローマ時代はちょっと別にして、帝政以後のローマ史を見ると、全く権力をわがものとしたあとは、皇帝でも属州の総督でも、一門一族で国庫を貪り盡し、党派以外のものの、時には党派のものでも突然切って捨て、その地位、財産を没収して自分のものにしてしまっている。権力を誇示してあからさまにそうした不法を行っている。中世からルネサンス時代の群少専制君主たちにしても、野心と策謀と残虐な実行力で権力を奪い取ってきたものたちで、権力の正当性などほとんど問題にしていけない。彼等は「自分の権力の保持を第一義において臣下に対し」、いつでも裏切り切り捨てることをしている。ルネサンス末期から18世紀末までは外国人の支配の下で虐げられ奪われてきた。例えばスペインの支配地域ではスペインは「ミラノで吸い盡し、シチリアで奪い盡し、ナポリで骨まで齧り盡している」、と表現されるような状況であった。こういう状況下では国家とか権力とかを信ずるなんてことにはならないのである。さらにリソルジメント以後は、新生のイタリア王国と教皇庁の不和対立が生じ、権力が二分され、教皇庁側についた人々は教皇領を奪ったイタリア王国を認めず、国家への協力を拒否した。この戦後50年の歴史を見ても、南部開発のため巨費が投ぜられながら大した成果をあげることなく、その巨額の諸費用は政党の有力者の仲間内へ吸い上げられて消えていった。

イタリア史を貫いて、国家権力がイタリア人に恩恵を与えたという事態は少なかったと言えるのではないか。ほとんどなかったと言ふべきかもしれない。ここからイタリアではアングロサクソンのように、国家を共同体と見なし、国民は国家にその権力を委託し、国家は国民の代理として国民のために仕事をする、という関係が生れなかった。相互に権利と義務がある関係として国家を見るような歴史をイタリアは展開できなかったのである。ここから生れた国家観は、国家に対する深い疑念と、不信であった。

こういう国家観にとりかこまれてきたのがイタリアである。

その(二) 地方主義

「イタリア人はいない」⁽²⁾と言えは驚かれるかもしれない。もっと正確に言えば、「イタリア人はいなかった」、とすべきかもしれない。実際百年くらい前まではイタリア人はいなかったのである。いたのはミラノ人であり、ローマ人であり、ナポリ人であった。これらを総称したイタリア人はいないと当時のイタリア人が書いているのは一面では正しいことであった。

イタリアの歴史をざっと振り返ってみても、リソルジメントの時代までイタリアの歴史は統一されてくる歴史ではなく、分裂して分離していく歴史であった。例えばローマ帝国が滅んでからはビザンチンの勢力が入り、それに抵抗するもの、迎合するものが入り乱れて戦い、分裂を進め、ゲルマンの諸部族が入れかわり立ちかわり進入し、その占領は短期のものが多かったとは言え、それと戦うもの、妥協するものの攻めぎあいには分化を促した。中世盛期には神聖ローマ帝国がたびたびイタリアを侵略し、その中で皇帝を旗印に掲げるギベッリーニ派諸都市の出現、皇帝に対抗してローマ教皇を旗印に掲げるグェルフィ派諸都市が生れ執拗に戦い合う。

さらにその間を縫って群少国家が生まれ生存

をかけて争い合う。ルネサンス時代末期からはスペイン、フランスの進出と、その手先の勢力が争い、17、18世紀はスペイン、オーストリア、フランスの進出とその息のかかった小専制国家の分立抗争。どの時代をとってみても、イタリアをして一つにまとまるような状況にはなかった。こういう状況の中で、政治形態をみれば、君主国あり、公国あり、共和国ありとばらばらで、それらが列国と結びつき、独自の法を持ち、制度も違うものになってきたのである。風俗習慣もスペイン風のもの、フランス風のものが入り、それぞれの小国が相互に憎悪をかき立て競ってきた。

そういう長い分裂の歴史が抜き難い極端な地方主義（カンパニリズム）を生んできたのである。地方主義はイタリアに限らずどの国にも大なり小なりあるが、イタリアでは極端な大なりの地方主義がはびこり、ヴェネツィア人であり、フィレンツェ人であり、ジェノヴァ人であり続けたのである。

明治の中頃イタリアを訪れたある日本人もこう記している。「狭隘なる愛郷心の爲に国家全軀を忘る悪癖は伊太利人の痼疾にして、容易に拭い去るべきにあらず、以って今日尚眞の毒を流しつつあるものの如し」。そして続けて「伊国各都市なるもの今尚互に嫉視、猜疑して甲乙互に軋轢し、フヒレンツは羅馬を嫉み、羅馬はナポリを妬み、相罵り相譏りて用捨することなく、…却って外國の意を迎えて眞兄弟たる隣市を賣らんとするものなきにあらず。所謂地方心に制せられて邦國心なきものと云うべし」と。丁度百年くらい前でもこの有様で、自分はイタリア人だと考える人はごくわずかの知識人を除いていなかったのである。

さすがに20世紀も終りの今日ではミラノ人だ、フィレンツェ人だと名乗るイタリア人はいないが、まだイタリア人の心のどこかで秘かに生き続けてもいる。

その(三) 縁故主義

イタリア史を紐解いてみると、どの時代にも縁故主義と言うか、知り合い第一主義と言うか、一門一族で事を運んで、知り合いでないもの、一門一統に繋がらないものを排除し、無視してしまうというやり方が非常に多いのに気づく。古くは古代ローマ時代のパトローヌス（パトロン）とクリエンス（子分、家の子郎党）の間の恩恵、利益、地位の提供と、クリエンスのお返しの関係から作られた強固な一門一統主義に始まって、中世には一門のリーダーが邸にその勢力を誇示する塔を建て、その聳え立つ塔を中心に塔仲間と称される縁故勢力の形成がある。その塔仲間はある者はギベッリーニを名乗り、ある者はグエルフを名乗ったが、実は錦の御旗として名乗っただけで、もっと血縁地縁に基づく縁者の集団であった。ルネサンス時代から17・18世紀には教皇の行った甥主義（ネポティズム）がある。身内身寄りに高位高官の位を授け、所領を与え、年金を与えて金持ちにし、しかるべき縁組みを図って家門を格上げたものである。今日のイタリアで横行しているコネ、コネの社会もそれである。就職するのもコネ、役所で申請を受付けてもらい仕事を進めるのもコネ、銀行でも郵便局でもコネ、どこまでもコネである。また政党の有力者はその兄弟、息子、義理の兄弟、義理の息子、従兄弟に再従兄弟を国営企業や持株会社や、いろいろな産業のしかるべき部署、地位に驚くべき数で送り込んで縁者びいきを平気でしている。ことほどさように、ずっと昔から血縁にしろ、地縁にしろ、親しい者同士の結びつきでイタリア社会は成り立っている。

こういう縁故主義はどこから来ているのだろうか。考えてみるに恐らく第一の原因はイタリア人に深く染みついた懷疑主義にあると思う。彼等の懷疑主義は生半可なものではない。何も軽々しく信じない生き方なのである。特に人を簡単には信じない。16世紀から20世紀までイタリアを訪れた外国人はそのイタリ

ア人の生き方を興味を持って書き残している。例えば17世紀イギリスのラッセルズ師は「イタリア人のおちついた賢明さは学んでほしいが、何も信じない生き方は学んでほしくない」、と記しているし、スタンダールはイタリア人の怯えた警戒心からくる根強い不信を書いている。疑って疑って信じないのだ。イタリア人にとっては、信ずることはいいことだ。しかし信じないのはもっといいことなのである。けれども人間は社会的動物で、一人では生きられない。誰かと一緒に生きなくてはならない。そのとき二次的にしろ信じざるを得ないことになる。そのとき信じられるのは血縁者か、ごく親しい知人しかいない。そこから縁故主義が生れてきたのだと思う。

ここでまた疑問が起ってくる。その深い懷疑主義はどこからきているのか。やはり歴史が生み出したというよりほかはない。一門一統で権力を握り、一旦権力を自分のものにすると、自分のため、また友人のために利権を分け合い、国家をも食べ物としてきた歴史が人々の間に深い懷疑心を育ててきたのである。パトローヌスの一人であるローマ皇帝にしてもその権力の濫用と国の富の収奪、一門一族での利益の分け合いのすさまじいありさま、中世から近代の群少専制君主の野放図な可斂誅求、今日のイタリア政治のコネで結ばれた仲間同志の権力の不正な行使、汚職の横行など、どれを見ても不信を増幅してきたものである。

その(四) 階級差にこだわらない

「上を敬わず、少しで満足し、階級差を気にせず、金持ちになろうとも思わず、…」と、150年ほど前のあるアメリカ人が書いているが、イタリア人の階級意識の薄さは訪れた外国人を驚かすことの一つであった。あるときN. ホーソンはコルソ通りで、ナポリのブルボン家出身の大公夫人に出会った。そのとき多くのイタリア人がその場に居合わせたのだが、誰一人として夫人に敬意を現わさず全く

無関心な様子に戸惑う。「どういうことなのか」と。J. フェニモア・クーパーも同じ内容のことを記している。フィレンツェで大公の宮殿へフィレンツェを去る挨拶に出向いたところ、大公も姫君も平服で、ざっくばらん、堅苦しくなく、一時間ほど座って談笑した。階級の差を意識させるような儀式張ったところが何もなかった。明治の日本人も同じ体験を書き残している。「余は入口にて敬禮をなし居る内に、皇帝はツカツカと戸口まで来られ、握手し給ひ、椅子に座せよとて手をひきたるまま案内せらる。陛下は室の一隅の“ソーハ”に座し給ひ、余に椅子に座せよとタッテ日はる故、止むなく椅子に座す。膝を突き合わせて話をせらるる具合は、全く奮知の友人に對するが如く、極めて丁寧にして簡單なり。謁見は此くして單獨にして何人も他には居らず」に進んだのである。階級差にこだわらずの態度に驚き、感銘を受けている。

貴族のあり方についても、アルプス以北のヨーロッパの人々からすると、イタリアの貴族のあり方はとても奇妙で、貴族でないように見えた。17世紀初めのフランス人の記述に次のようなものがある。「ローマの貴族たちは一般庶民と同じものを着、行動の仕方や仕事でも同じである」。ジェノヴァやヴェネツィアやフィレンツェで貴族がお金のことや商売のことに熱中しているのを見てびっくりする。貴族の精神と商人の精神は相容れぬもの、というのがアルプス以北の世界である。それなのに時にはドージェ自身も商売をしているのを知り、その俗な姿に驚いてショックを受ける。アルプス以北の貴族なら、まず意識の上で、截然と一般庶民と区別があり、行動でも、装いでも、仕事でも、住む所でも、はっきりと違っている。アルプス以北の貴族は平時は狩猟や領地の管理が主な仕事で、都市から遠く離れた田舎の所領に城を構えて平民とは没交渉に住んでいる。商業なり工業なりの世俗の仕事に手を染めることなどまず絶対にならない。たまに二つの階級が一緒になるようなことがあれば、お互いにイライラして不愉快な

苦痛でその場をいずらいものにするのが普通である。

しかしイタリアでは違っていた。例えばルネサンス期のフィレンツェでは、絹織物業やその取引に貴族層でも従事している。それを恥かしがることもなく、またそんな姿を軽蔑することもない。ヴェネツィアでもジェノヴァでも同じである。一門に幾人かの兄弟がいればそのうちの一人や二人は商人となつて一門のために嫁ぐ。富の源泉が商工業にあることを了解しているからである。学問や芸術の世界でも貴族も平民と共に活動している。アルプス以北のように貴族と平民の別々の二つの世界があるのではない。その二つの世界は混在していろいろの場で気兼ねなく一緒になっている。そして差異をあまり意識しない。召使いと主人の間でも話題は共通である。19世紀の初めにスタンダールが経験したように、「ここフィレンツェでは侯爵夫人と彼女の髪結い女との共通の話題は音楽と色恋い話である。女に才知があればその間の相違は大きなものではない。…えらいお殿様の話題とその部屋付きの従僕の話が同じなのである」。

こういうことはすでに13世紀ころから始まっている。トスカナ地方でみてみれば、貴族たちは12世紀ころから田舎を捨て都会に移住している。強制的に移住を強いられた者、自発的に移住した者、あるいはその家臣もいるが、相当数の貴族層が例えばフィレンツェへ移住し、その貴族は時代と共に平民に同化して行く。あるいは同化させられて行き、激しい内乱の中で、ときには貴族の出身を消すために名前まで変え、あるいは変えさせられている。彼等は土地から遊離し、アルプス以北の貴族のような所領からの収入だけでは生活を維持することが出来なくなる。商工業に入らざるを得ず、そういう中で貴族と平民は入り混り、区別が曖昧になった。そういう伝統は19世紀末でも外国人が注目していることである。イギリス人のギッシングは「あらゆる階層に属する人たちが、本当に気楽な様子で混り合っている。色のついた長いショール

をつけた無帽の労働者階級出の少女たちが、恥かしがりも憶気ずきもせずにご夫人方の間を歩きまわっている」と書いている。ただ気楽に混り合っていたが、その間に心の通いはほとんどなかったことは、何人もの人が指摘していることで忘れてはならないことである。

その(五) 17・18世紀のイタリア

イタリア人の国民文学としてダンテの『神曲』と共に読みつがれているものに、アレックスサンドロ・マンゾーニの『いいなずけ』がある。17世紀のミラノを背景にスペインの専制的な支配下で、若い男女が艱難辛苦の末結ばれるという壮大なロマンである。私は今ここで『いいなずけ』の解説を試みようとするわけではない。この小説の背景となっている17・18世紀イタリア社会の現実をイタリアを訪れた外国人の証言をもとに検討してみようとするものである。

すでに16世紀の末イタリアを旅したモンテーニュは、イタリアがルネサンス時代以来の自由を失ってきていること、そういう自由を失った中で、虎の威を借りて空威張りしているゴンファロニエーレを見て、イタリア社会を哀れんで見ている。モンテーニュばかりでなく、イギリスのダリントンも同じ頃イタリアへ行き、スペイン支配下で自由を失い、惨めな状態で生きるフィレンツェの人々のことを伝え、またそのフィレンツェの支配下にあるピサやシェーナもかつての自由であった日々を追憶しながら、メディチ家の重い軛の下で生きている苦悩を書いている。

17世紀にはいると、反宗教改革の進展と共に、政治的抑圧と共に宗教的抑圧が大きく立ち上がり始める。例えばジョン・ミルトンがナポリで直面した経験がある。ジャンバッチスタ侯爵と話をしていたとき、話題が宗教のことに及ぶと途端に侯爵は口をつぐみ、話題をそらしてしまうという場面に遭遇した。イタリアでは自由に宗教のことを論ずること

はできないこと、カトリックキリスト教会の目がどこからも監視していて口をつぐまざるを得ない状況にあることに気づいた。

この状況は18世紀も同じで、あるイギリス人はこう書いている。「我々イギリス人にはここではどれほど会話が制限されているか充分に感じ取られます。イタリアでの会話では、自由や政治や宗教についての問題をあえて口にしてはならないのです」。ここでは「何か知識を得ようとすれば、その人は追放されるか、黙らされてしまいます」。17世紀のうちに二度の市民革命を経て、政治の近代化を進め、市民社会を作りあげつつあったイギリス人から見ると、イタリアは政治的専制と宗教的抑圧の下に自由を欠如した社会であった。イギリス人ばかりがこう見たのではない。フランス人も同じように見ている。例えばスタンダーは「1550年から1796年までの、この上なく疑い深い、この上なく邪悪な、この上なく残酷な専制政治の巨大な塊によって押し潰された社会」と表現し、「政治を語ることが身に危険を招き、絶望をもたらす」のであり、「宗教が権力を手助けし…窒息させてしまっている」社会と見ている。

イタリアではこの状況は19世紀の半ばでもまだ続いている。その状況下でのイタリアの知識人の苦悩をw.ストーリーは対話の形でこう書き残している。「なぜ貴方にふさわしい事に才能をお使いにならないのですか。踊ったり、おしゃべりしたり、フェンシングをしたり、朝の訪門といったことかわりに、何かいかがですか。」「何をすればよいとおっしゃるのですか。」「何か研究なさるとか。何かお書きにでもなられては…」。『無駄なことです。考えていることをどのように書けるのです。書いたものをどのように発表できるのです。…私達が唯一しあわせであるのは、何もしないで、無知でいることなのです。知れば知るほど不幸にならねばならないのです』。言論の自由も出版の自由もない中で、“見ざる、言わざる、聞かざる”しかなかったのである。イギリスやフランスやアメリカが18世

紀の末に近代国家へ大きく一步を踏みこんでいたとき、イタリアは政治的にも宗教的にも思想的にもアンシャン・レジームのまま小さな一步も踏み出してはいなかったのである。

2 イタリア人

ついで外国人がイタリア人について、どうその特質、その生き方、その価値感を把え、イタリア人らしさ（イタリアニタ）をどのように表現してきたのかを検討してみる。現在のイタリア人からは把えられないが、過去には外国人の目を強く惹きつけ、独特のイタリア人らしさであったもの、現在も過去から続いてイタリア人に見られるもの、現在はその存在がうすくなって隠されているが、イタリア人に続いているもの、という観点から整理してみる。

その(一) ドルチェ・ファル・ニエンテ

イタリア人の生き方を表現する言葉にドルチェ・ファル・ニエンテという言葉がある。今日ではあまり使われないが、18世紀から20世紀の初めまでイタリアを訪れた外国人がしばしば使っている。あるときは羨望の目差しで、あるときは軽蔑の気持ちをこめて、またあるときは断乎として拒否しながら、イタリア人の独特の生き方を現すものとして使っている。

どういう生き方かと言えば、一日何するでもなくポカンとして過ごすイタリア人の生き方である。それをあるフランス人はこう書いている。「この国では人々は何もしないでいられるような場所を必要とする。…イタリア人の人生の根幹を形づくっている。“しあわせだ”という深い感情を理解するには、日曜日にフォーロ・ロマーノの傍のパラチーノの丘の廃墟へ行って一緒に座してみなければならぬ。…イタリア人の最大の喜びは生きること、…この国では人生とは生きingことをゆっくりと（何もしないで）享受し、味うこ

とである」。羨望の気持ちをこめてフランス人は見たのである。またこうも書いている。「イタリア人からゆったりとした時間的余裕を奪ってイギリス人流の働き方をやらせてみなさい。そんなことをすればイタリア人の幸福の半分を君は奪ってしまうことになるでしょう」。

こういうドルチェ・ファル・ニエンテの見方に対して北部ヨーロッパ（アメリカ人も）の人々はそのほとんどが否定的な見方で見る。怠けていると見てしまうのである。あるイギリス人はゆったりと木陰で寝そべっているイタリア人を見て、「イタリア人は世界一の怠け者である」、と書いている。一日中せかせかと何かに追い立てられて生きている人々には、日がな何するでもなく、朝からベンチに座り込んでお互いを眺め合っているイタリア人は怠けているとしか思えなかった。そしてこう書く。「もっと行動的で忙がしい国民は、何もかも変革して不満を解決しようと追い立てる心根を持たないイタリア人を軽蔑する」と。どちらの見方を取るにせよ、200年ばかり前のイタリア人はゆったりと生きていたのである。彼等は「我々より気難かしくなく、上を敬わず、少しで満足し、階級差を気にせず、金持ちになろうとも思わず、現実を変えようとも思わない。不平不満のデーモンが彼等を追い立てるようなことは決してない。…我々は欲し、彼等は享受する」。しかし100年ばかり前のリソルジメントの成就から以後ドルチェ・ファル・ニエンテは急速に消えて行った。今日ではほとんど目にしない。しかし長い間に培われた国民性は急にすっかり無くなってしまふものではない。今日でもイタリア人の生活のどこかにじっと潜んで生きているにちがいない。例えばバカンスで海辺のリゾートへ出かけたときの彼等の時間の過ごし方などに見られる。浜辺でビーチパラソルを拡げて、一日中泳ぐでもなく、何するでもなく、ぼんやりと眺め合って寝そべっている。日本人のようにバカンスに行つて疲れて帰ってくることはないのである。

その(二) チチズベオ

あまり目にしないイタリア語である。しかし18世紀から19世紀には外国人の書いたものに特異なイタリア的習慣として、言及されている。イタリア起源の言葉なのか、外来のものなのか、いつ使われはじめたのかもはっきりしない。しかしある時期の極めてイタリア的習慣で、当時イタリアを訪れた外国人は興味深々で話題にしている。どういうものかと言えば、良家の夫人が持つ男友達のことである。「いつでもどこでも彼女の傍を離れず、例えば夫でもその権利にはあえて口出しをしない男友達である」。その男友達は夫の代わりをする。「朝夫人の寝室へやって来る。彼女とココアを飲み、着替えを手伝う。どこへでも同行し、仕える。ときには数名のチチズベオを持っていることもある」。こういう存在のチチズベオに対してイギリス人は激しい反感もあらわに罵倒する。「こんな動物にも類したこと」、「人間の墮落の最後の段階を示すもの」、「イギリス人の夫でこんなことを耐え忍ぶ人はいないだろう」と。イギリス人は不倫、背徳をそこに嗅ぎとって断じて男として許されないと息まいている。

フランス人は違ふのである。疑わしい点はあるが、「こういう習慣が基本のところでも下品でも不道徳でもないことは、男も女もなんのショックもなしにチチズベオのニュースを話題にしていることからわかる」と。根底のところではプラトニックなものとしてフランス人は見た。そしてチチズベオに同情もする。「実現する希望のない恋人で、選んだ夫人のために自分の自由を犠牲にして夫人の命令に従っている」、哀れで悲しい、一面では頓馬な習慣と見た。そのフランス人の見方は現代の歴史学の大家フェルナン・ブローデルまで続いている。「私はそこに頹廃を見てとるわけではない。せいぜい一つの遊びを見てとるだけだ。上流階級は気骨の折れる毎日の生活の中で度を越す危険のないその遊びを容認するのである」。

英仏どちらのとり方がチチスベオの本当の姿であったのかは当時と同じく今でも「外国人には解き難い問題」のままである。モンテスキューも言うように、「ある民族の風俗習慣は…他の民族のものよりよりよいなどと評価できるものではないように私には思える。というのは誰がその評価の基準を判断するのか。それぞれの民族がその国固有の風俗習慣の基準を作ってきたのであり、その基準で他の民族を判断する以外、共通の基準はない」というのであれば、イタリア人にまかせるよりほかないであろう。

当のイタリア人はこう見た。世界一優しい人間であるイタリア男の優しさの一つの現われで、道徳的により進んだ姿を示すものだ。良家の夫人にすれば公に男友達を持っていないとすれば、それは一種の恥、不名誉なことであり、夫にしても妻にチチズベオがいないとすれば体面を失うことであったのである。

その(三) 身を装おうこと

現代ファッションの世界でミラノが、パリ、ニューヨークと共にその最高峰の一角を占めていることは、ファッションにあまり興味のない人でも認めていることである。ましてや関心のある人々にとっては、毎年ミラノから発信されるミラノコレクションは、感嘆と羨望と嫉妬の心をこめて、固唾を飲んで見まもられているデザインであり、色彩である。それがまた翌年の世界の流行を創り出す。

こういうきらびやかに身を装うということは、現代になって突然イタリア人に起ったということではない。古くからそうなのだ。すでに15世紀の末にイタリア人が身を飾り、それにお金をかけることはイタリアを訪れた外国人の目を惹きつけている。ヴェネツィアでは「美しい緋色の絹地で上品に仕立てた服をまとった紳士たち」と15世紀末、フランス人のフィリップ・ドゥ・コミーヌは驚きの目で記しているし、ミラノでは「上流のご婦人方

は金の羅目入りの服をまとい、高価な宝石で着飾り、髪をたばね、大聖堂界限で美しさを競い合っている。…男たちはいい仕立ての服を着、装身具で飾り…」との17世紀の記述がある。ナポリでは15世紀末のシャルル九世のイタリア遠征のときに書かれた次のような記述がある。「ビロード製の高価な衣服で装った、…地面までとどく長い上衣を着た、目や髪まで飾り、豪華な宝飾品を身に着けた婦人たち…」と。北から南まですでに15世紀から17世紀に他人の目を意識してイタリア人は装っていたのである。こういう身を飾り装うことはイタリア人の習慣で、19世紀にも、あるアメリカ人がこう書き残している。「着る物への情熱はイタリア人には一般的なことで、男性はご婦人方と同様にそれが好きである」。20世紀になればイタリアを訪れた日本人もイタリア人のその習慣に気づき書き始める。フッシュム華かなりし頃イタリアを訪れた深尾須磨子は「見え形を整える。…見る目に美しい見え形、それを張ること、それをきちんと整えること、それが彼等の久しい習慣にまでなった禮儀である」、と書いている。また「スタイルブックから抜け出てきたような人はそんなに多くいるわけではないが、…よく観察するとどの人も例外なく個性的なおしゃれを楽しんでいて、自分の好み、自分の背格好に合ったものをうまく着こなしている」。イタリア人は見た目のよさ、外観を気遣う。前にも書いたように、それも女性だけではない。男性も同じで、現在のイタリアでは紳士物の衣料品店の方が女性物のそれより多いという。

こう見てくるとイタリアがファッション世界で抜きん出てくるのはなるほどと納得できる。いつの時代も身を飾り装うことを気遣い、それで自分をアピールしている。そういう伝統が現代のイタリアンファッション産業を支えているのである。そしてこういう目に訴える文化がイタリア文化なのである。古代ローマ時代以来“パンと見世物”を提供してきた国である。絵画、彫刻、建築は言うに及ばず、デザインの世界も映画の世界も最高の

ものを創造してきた。イタリアンファッションも顕著なイタリア文化の一部門なのである。すでに18世紀初めにモンテスキューが「見せる物は何でもイタリア人を魅了する」と書いているが、今日もそれは続いている。

その(四) 言葉の重み

言葉の重みというか、言葉が社会で果たす役割りの重要性というか、コミュニケーションの社会での役割りの比重の大きさというか、イタリア人の言葉について外国人は意外に古くから問題にしている。一つは言葉使いの点である。すでに16世紀にイギリス人はイタリア人の言葉の使い方に注意を喚起している。少々丁寧すぎるのではないか。別の言葉で言えば、大げさな言葉使いが多いことを問題にしている。「丁寧な言葉使いに惑わされてはならない。vostra Signoriaとは平民同志で使う言葉であり、molto magnificoとは単に市民の間で使われる言葉であり、illustro Signorとは普通の紳士に使われる言葉である。…clarissimoとはヴェネツィアの紳士(貴族と称しているが)のことである」。これから200年ばかりして19世紀にもアメリカ人が同じことに注意を向け、言葉使いの丁寧さと、美しさについて書いている。そしてさらにbellissimoとかcarissimoとかいう言葉の頻繁な使用にイタリア人の性格を見ている。そしてまた反面ではイタリア人の使う言葉に美しさと反対の、アメリカ人なら使うのを憚るような言葉の使い方に驚く。普通ならアメリカ人の間ではそういう言葉の使用はよほど気をつけて、使わないことが多いのに、イタリア人は面と向って、平気で相手に投げ付ける。例えば、相手を傷つけ、生涯に渡って心に痛手を与えるような、忿怒を呼び覚ますような、愚弄する言辭、嘲ける言葉、さげすみの言葉、侮辱的な表現を投げ付け合うのに意外の感を現わしている。

またイタリア人が饒舌で、議論をすることが好きで、それに喜びを持っているのを見

て取る。特に明治から昭和20年代まで“沈黙は金なり”という諺を守ってきた日本人は、それを強く感じ受け取っている。広場や歩道で立ち寄り、手を振り、首を振り、顔の表情を変えて熱心に話している姿に芝居を見ているような心待ちになってしまう。そして今は相当変わってきているが、まだどこかで意心伝心を信じている日本人は、イタリア人の言葉のやり取りにイタリア人らしさを見る。

正式な議論の場でもイタリア人はレトリックを駆使し熱烈に際限なく論じ合う。しかし熱烈に論じ合いながら、一方では冷静に冷めた目で議論をたしかめている。伶俐な知性で計算しながら議論を展開する。そして市井の場でも公式の場でも論じつくそうとする。「イタリア人は上は政治家、坊さん、学者から、下は市井の男女に到るまで伝統的に雄弁家たち」なのである。饒舌な人を日本では口先から生れたような人と表現するが、正にイタリア人の多くは口先から生れたような人たちで、どこの国の人も(スペイン人は別かもしれないが)、イタリア人は口がうまいと受け取ってきたのである。イタリア人自身もいろいろの機会に、“口で来い、手で来るな”という諺を発するが、まず議論なのだ。言葉の交換が第一なのだ。そういう人たちである。

その(五) 伶俐な人びと

15世紀の末すでに、フィリップ・ドゥ・コミーヌは、イタリア人というのは要領よく立ち廻り、決して負け犬にならないしたたかさと、素朴さとは無縁の抜け目のなさをを持った人びとだと、イタリア戦争に参加してイタリア人と交渉して感じ取ったものを記しているが、それはイタリア人の特性の一面である。この伶俐で知的で冷めた目で生きるイタリア人については、18世紀にもシャルル・デュパティが書いている。彼等イタリア人は人の表情も、人の言葉も、言葉の抑揚も決して信じない。信ずるのはただ事実だけだと、冷徹なリアリストの面を指摘している。20世紀には

同じフランス人のアンドレ・シーグフリードが、「彼等は懐疑的で、迷信を信じているときでさえ軽信的なところはない。一般に素朴なところはない」と言い切っている。このことは19世紀から20世紀の日本人も強く印象づけられたイタリア人の性格である。「怜悯にして抜け目ない人びと…」、「彼等が意外なほど怜悯にして計算的であること…」、「陽気で明るく人なつっこい性格のどこかに冷静でさめた一面を持っている…」云々と。いい悪いということではなく、イタリア人の性格の一面を指摘している。

こういう性格もイタリアの歴史の中で作られてきたものである。分裂に分裂を重ね、長い間ばらばらで統一国家がなく、無数に分立した小国はその多くを専制君主が支配し、それをさらに異民族が独裁的に支配する構図の中で、人びとは要領よく、口先き巧みに、美辞麗句を並べ立てて、冷静に周囲を見廻しながら毎日を送らざるを得なかったのである。冷静に注意深く周囲に気を配って怯えながら生きるイタリア人の様子は、前述のようにミルトンが書いており、スタンダールが書き残している。19世紀にはあるアメリカ人も次のように記している。「イタリア人と淋しいカンパーニアを歩いていたとき、その道の悪さに言及して政府の無為無策を言おうとしたら、そおっと立ち停って周囲を見廻し、あたかも城壁が耳を持っているかの如く恐れ、誰もいないのに口を手でふさぎながら、「貴方は外国の方です。だから何でも好きなことが言えます。けれども私たちは口は飲んだり食べたりするために与えられているので、政府についてとやかく言うために与えられているのではありません」と小声でささやいた」。(3) こういう状況の中では、注意深く、抜け目なく、怜悯な生き方が要求されたのである。

『東海女子大学紀要』 第11号 平成4年
「フランス人の見たイタリア」

—『イタリア論』のためのノート(二)—
『東海女子大学紀要』 第13号 平成6年
「アメリカ人の見たイタリア」

—『イタリア論』のためのノート(三)—
『イタリア学会誌』 第45号 平成7年
「日本人の見たイタリア」

—『イタリア論』のためのノート(四)—
『日伊文化研究』 第36号 平成10年

- (2) V.Gioberti : Del primato morale e civile degli italiani.
vol 1. PP. 117-118. 1846
- (3) W.M.Giles : Rome as seen by a New Yorker in 1843-1844.
P. 193. 1845

(1) 「イギリス人の見たイタリア」
—『イタリア論』のためのノート(一)—